

梅若七兵衛

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

引続きまして、梅若七兵衛うめわかしちべえと申す古いお話を一席申上げます。

え、此の梅若七兵衛という人は、能役者の内狂言師でございまして、芝新銭座しばしんせんざに居りました。能の方は稽古のむずかしいもので、尤も狂言の方でも釣つりぎ狐つねなどと申すと、三日も前から腰をかゞめている稽古をして居ませんければ、その当日に狂言が出来んという。それでも勤めますと後二三日は身体が利かんくらいだという、余程稽古のむずかしいものと見えます。許し物と云つて、其の中うちに口伝物くでんものが数々ございします。以前は名人が多かつたものでございします。観世善九郎かんぜぜんくろうという人が鼓を打ちますと、台所の銅ど壺うしの蓋ふたがかたりと持上り、或は屋根の瓦がばらばらと落ちた

という、それが為瓦胴がどうという銘が下りたという事を申しませんが、この七兵衛という人は至つて無慾な人でございます。只宅うちにばかり居まして伎わざの事のみを考えて居りますから貯えとてもありません。お大名から呼びに来ては往ゆきません。鼻眞のお屋敷から迎いを受けても参りません。其の癖随分贅沢を致しますから段々ひん貧に迫りますので、御新造ごしんぞが心配をいたします。なれども当人は平気で、口の内で謡うたいをうたい、或はふいと床から起上つて足踏をいたして、ぐるりと廻つて、戸棚の前へびたりと坐つたり何か変なことをいたし、まるで狂きちがい人じみて居ります。ちようど歳暮くれのこと

で、
内儀「旦那えく」

七「えゝ」

内儀「貴方には困りますね」

七「何ぞというとお前は困るとお云いだが何が困ります」

内儀「何が困るたつて、あなた此こんな様に貧乏になりきりまして、実に世間体も恥かしい事で、斯様な裏長屋へ入つて、あなたは平気でいらつしやるけれども、明日あす食べますお米を買つて炊くことが出来ませんよ」

七「出来ないつて、何うも仕方がない、お米が天から授からないので」

内儀「そんな事を云つていらしつては困ります、何処へでも忠実まめにお歩きあそばせば、御鼻屑のお方もいかいこと有りまして来い

く、と仰しやるのにお出でにもならず、実に困ります、殊に日いっか
外中じゆう度々たび／＼、お手紙をよこして下すつた番町の石川様にもお氣
の毒様で、食べるお米が無くつても、あなたは心柄で宜しゆうご
ざいませうが、私わたくしは実に困ります」
七「困つたつて、私わしは人の家うちへ往つてお辞儀をするのは嫌いだも
の、高貴うえの人の前で口をきくのが厭だ、氣が詰つて厭な事だ、お
大名方の御前ごぜんへ出ると盃を下すつたり、我儘な變なことを云うか
ら其れが厭で、私は宅うちに引込ひっこんで、何処いへも往かない、それで悪
ければ仕様がない」

内儀「仕様がないたつて、あなた何へいらつしやいましよ、あの
石川様へお歳暮だつて入らつしやると、いつでも貴方に千足ぐら

い御祝儀を下さるじやアありませんか」

七「他人ひとのものを当あてにしちやアいかん、他人のものを当にして物を貰うという心が一体賤いやしいじやアないか」

内儀「賤しいたつて貴方、お米を貰うことが出来ませんよ、今日も米こめ櫃びつを払つて、お粥にして上げましたので」

七「それはく、苦々しいことで」

内儀「そんな事を仰しやらずに往つて入らつしやいまし」

七「じやア往いこう、だが当にしなさんな」

内儀「あなた、そのお服装みなりじやアいけません、これを召していらつしやい」

七「なに、これで沢山だ、悪いと云えば帰つて来る」

と無慾の人だから少しも構いませんで、番町の石川という御旗

下の邸やしきゆへ往くと、お客来で、七兵衛は常々御鼻肩だから、

殿「直すぐにこれへ……金田氏貴公も予かねて此の七兵衛は御存じだろう、

不断はまるで馬鹿だね、始終心の中うちで何か考えて居つて、何を問

い掛けてもあい／＼と答をする、それが来たので、妙な男で、あゝ

来た来た、妙な物を着て来たなア、何だハ、袖無しの羽織見た

ような物を着て来たな、七兵衛構わずこれへ」

七「へえ」

殿「誠に久しく会わんのう」

七「へえ」

殿「再度書面を遣つたに出て来んのは何ういうわけか」

七「へえ」

殿「他へでも往ったか」

七「へえ」

殿「煩いでもしたか」

七「へえ」

殿「然^そうでもないようだな」

七「へえ」

殿「何だかそれじゃア分らん、迎いをやっても来てくれんから恨んでいた。今日は宜く出て来たの」

七「へえ」

殿「続いて寒いから雪催しで有るの」

七「へえ」

殿「何だえ……御覧なさい、あの通りで……これ誰か七兵衛に浪々酌をしてやれ、膳を早く……まア〜これへ……え、此の御方おかたは下谷したやの金田様だ、存じているか、これから御鼻屑おびになつてお屋敷へ出んければ成らん」

金田「予て噂には聞いていたが未だしみ／＼会わん、下谷辺へ来るような事があったら、身が屋敷へも寄つておくれ」

七「へえ……彼方あちらへは往いきません、面倒だから何処どこも往きません殿「何かぐず／＼」口の内で言っているな、浪々酌をしてやれ、もう一杯やれ」

七「へえ、お酒なら否いやとは云いません」

殿「其の方が久しく参らん内に私はわし役替やくがえを仰せ付けられて、上かみより黄金を二枚拝領した、何うだ床間ここれにある、悦んでくれ」

七「へえ」

と張合のない男で、お役替だと云えば御恐悦でございますとか、お目出度いぐらいの事は我々でも陳のべますが、七兵衛は面倒だというので、只へえへえという、誠に張合拔がいたします。

殿「何うだ見せようか」

七「見たって仕様が有りません」

殿「なれども上から拝領するは容易ならんことだよ」

七「へえ……大きなもんですな、これは幾許いくくらぐらいのもんですな」

殿「それは何んだの相場によつて違うが、大抵二十五両ぐらいの

通用のものである」

七「へえ一枚二十五両ツ……これが一枚あれば家内にぐず／＼
いわれる訳はないが、二枚並んで、も他人ひとの宝を見たつて仕方が
ないな」

殿「何をぐず／＼いつて居おる、別に欲ほしくはないか、一枚やろ
うかな」

七「へ、へ、へ、嘘うそばかり」

殿「なに嘘うそをいうものか、一枚やろう」

と御酒機嫌とは云いながら余程御鼻はな根と見えまして、黄金を一
枚出された時に、七兵衛は正直な人ゆえ、これを貰もらえば嘸さぞ家内が
悦よろこぶだろうと思ひ、押戴おしいて懐ふところへ突つ込んで玄関へ飛出しました。

殿「あれ／＼七兵衛が何処かへ往くぞ、誰か見てやれ」

七兵衛は委細構わずどツと、駈けてまいると、ちら／＼雪が降り出してまいりました。どツと、番町今井谷を下りまして、虎ノ門を出にかゝるとお刺身にお吸物を三杯食ったので胸がむかついて耐りませんから、堀^{ほり}浚^{さら}いの泥に積っている雪の上へ吐^としました。十分嘔^はいて胸が癒^{なお}ったからせつせと新銭座の宅へ帰ってまいりましたので、女房は恟^{びつく}りいたしました。

内儀「おや大層お早く、たま／＼いらつしやいましたから今晚はお遅かろうと思いましたが、石川様は御機嫌宜しゆうございましたか」

七「はい、お役替で」

内儀「お役替、おゝくそれはお目出度いところへ入らっしゃいました」

七「どうもね、その、お役替で」

内儀「何うなすったの」

七「むゝゝ……じゃ」

内儀「懐を捜していらつしやいますが、何うかお落とし物ですか」

七「え……これは無い、これは無い」

内儀「何うなすったの」

七「何うしたって（金を受取り押戴き懐へ入れる真似をして考えている）」

内儀「あなた何をなすって入らつしやいます」

七「お屋敷を駈出して、虎ノ門の堀端で屈こむんだ時に懐すべから這はつたに違ちがいがない……ちよいと往いつて来るよ」

とまた駈出しました。

内儀「傘も差さずに貴方何処へいらつしやいます」

七兵衛はどん／＼駈けてまいり、こゝらで嘔おういたろう、と思おもいましたから、堀ほり浚さらいの泥どろが山盛やまもりりになつて居ゐります所ところを捜さがすと宜よい塩あんばい梅ばいに有ありましたから、

七「あゝ有難ありがたい」

と押戴おしおき、幸さいい雪ゆきで人も通とほらず、懐すべへ入れてせつせと歸かへつてままいり、

七「往いつて来たよ」

内儀「あらまア貴方何うなすつたの、笠も被らないで、そゝつかしいお方じゃありませんか、あなたは石川様で黄金を御拝領なすつたの」

七「え……何うしてお前それを知ってるえ」

内儀「何うしたつて貴方が、顔色を変えて懐を捜しながらお駈出しなすつたので、落し物に違いないと思ひまして出て見ますと、路地に小さい紙入に宜いい金物が打つたのが落ちてましたから開けて見ますと黄金が入っていました、何でもこれは石川様に頂戴したに違いないと思ひ、余り嬉しうございますから神棚へ上げて置きましたところへ、宜い塩梅に酒屋の御用が通りかゝりましたから申付けて御酒おみきを上げてあります、何にも包まずにお置きなさる

から落ちるんで、本当に貴方は何ぼ何だってお金を粗末に遊ばすと罰ばちが中あたりますよ」

七「嘘をお吐つき、黄金はこゝにちやんと有るんだよ」

内儀「有るたつて此処にもございますもの、御覧遊ばせ此の通り……」

七「おや／＼こゝにも一枚……一枚の黄金が二枚になったか知ら、これは驚いた、黄金が子を生みやアしめえ。(ポンと手を拍うち)あ分つた、二枚拝領したんだ、しかし一枚やろうと仰しやつて二枚出したのを嬉しまぎれに奪ひったく取つて二枚一緒に持つて来たに違ちがいない、これは済まん、直すぐに往つて返して来る」

と云いすて、せつせと石川様へ来て見ると、お客様がお歸りに

なつた後あとで。

殿「何だえ七兵衛、雪だらけになつて何うしたんだ」

七兵衛はせえく息を切り、

七「ハアー水ツ一杯……」

殿「これ誰か七兵衛に何かなんやんな、せえくと云つてゐるから……

：今日は変だな、だまつて駈出してしまつて、まだ種いろく々話もあつたに、何うしたえ」

七「殿様、誠にお恥かしい事でございますが、手前は何処からお招きがございましたも面倒だから何処へもまいりません、あなた方の我儘を聞くのが厭だから滅多に出ません、ところが今こんにち日家内が米がない、米櫃を払つてお粥を炊いた、これではいかんから

石川様へいらっしやれば、屹度お歳暮を下さると云いましたので参りました」

殿「そう思つて来てくれゝば嬉しいじゃアないか」

七「ところが黄金を下さいましたろう、貴方が」

殿「左様」

七「私は余り嬉しいから二枚一緒に奪ひったく取りましたものか、一枚遣ろうと仰しやつたのは慥たしかに覚えて居ります、それを懐に入れさせてせと駈けて行くと、胸がむか〜いたしますから虎ノ門の傍わきで反吐へどを吐つきました」

殿「汚ないのう」

七「それから宅へ歸つて懐を捜すと無い、定めてこれは反吐の中

へ落したんだらうと思ひまして、虎ノ門へ取^{とつ}て返し、反吐の中を搔廻すと有りましたから悦んで宅へ歸ると、家内の申すには、溝^ど板^{ぶいた}の上へ黄金が落ちてたと申しましたが、大方御前のお出しになつた時、二枚奪取つてまいつたに違いありませんから、これはお返し申して一枚頂戴……」

殿「いや其の方には一枚しか遣りやアしない……これに一枚ある」

七「へえ……こゝに二枚あります」

殿「一枚剥がして其方^{そち}へ遣つたんだよ、これに一枚あるだらう」

七「へえ……黄金はだん／＼^ふ殖^えるかね、妙な事もあるもんですな」

殿「貴様の拾ったのは」

七「堀^{ほり}浚^{さら}いの土の盛つてあるに吐^ついた反吐を搔廻して捜し出しましたから、再び返しにまいりましたので」

殿「どれ、見せろ」

と手に取上げてつく／＼見られ、

殿「これは泥の中へ埋っていたものだ、金色が違っている、書いた文字が摺^すれて分らんようになって居^おる、大方これは堀浚いの泥と一緒に出ていたを、其の方がだん／＼搔廻したので泥の中から出たんで、全く天から其の方に授かったところの宝で、凶^あらず獲^えたんだの」

七「へえ……それは飛んだ事をしました、彼^あ処^すへ往^あつて置いて来

ましようか」

殿「いや其の方の手許に置いて宜かろう、授かり物じゃ」

と早々石川様から御家来をもちまして、書面に認め、此の段町奉行所へ訴えました。正直の首こうべに神宿るとの譬たとえで、七兵衛は凶らず泥の中から一枚の黄金を獲ましたというお目出度いお話でございます。

(拋酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫
1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返す記号は原則としてそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本中「七兵衛」と「七兵衛」が混在しますが、「七兵衛」に統一しました。

※「／＼」の誤用と思われる箇所もありますが、底本通りとしました。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2003年11月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梅若七兵衛

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 鈴木行三校訂・編纂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>